

# 政治研究結果報告書

—政治研究助成—

一般財団法人 櫻田會  
理事長 増田 勝彦 殿

西暦 2025 年（令和 7 年）3 月 7 日

研究者名 谷澤 正嗣

大学名・職位 早稲田大学 准教授

第 42 回（2023 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。  
※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

近代国家の正当化可能性をめぐる基礎的研究

A Foundational Study in the Justifiability of the Modern State

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

The purpose of this study is to reexamine and reconsider the foundations of the modern state by focusing on the debate between liberal theories of state legitimacy, on the one hand, and critiques of state legitimacy raised by radical theories such as anarchism, Marxism, feminism, critical race theory, and so on. Between 2024 and 2025, I intensively studied John Rawls's famous defense of the liberal state, which proposed the liberal principle of legitimacy, and its thorough critique and ultimate rejection by a leading critical race theorist, Charles W. Mills. In my view, Mills successfully exposed the fundamental difficulties of Rawls's ideal theory of justice and its failure to address racial injustice. Rawls assumed that the modern state provides the basic structure of society, which is in principle justifiable as a system of fair cooperation. In doing so, he simply failed to recognize the historical reality of the United States and modern nation-states in general: they are based on racial, class, and gender domination that has been disguised by liberal theories. In response to this formidable critique of "white liberalism," we must confront the question of whether liberal states are at all necessary to pursue the ideal of society as a system of fair cooperation among free and equal individuals. In particular, we need to take seriously the claim of "methodological anarchism," recently advanced by Gary Chartier and Chad Van Shoelandt, that we need to rethink

whether the just society is possible without the presupposition of state policies and institutions.

#### ※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

近代国家システムに対する多様な批判のなかでも、最も根底的なのはその正統性ないし正当性を否定する批判である。たとえばマルクス主義、アナーキズム、フェミニズム、批判的人種理論による批判などが想起される。これらの批判によれば、国家の機能はけっきょくのところ個人や集団に対する「支配」(domination)以外のものではない。これに対して国家の正当化を図る一つの論法は、「本来の意味での国家」の機能を「法の実現」に求め、国家はこの機能のために必然的に生じたものである以上、その存在は不当ではないと論じることである。

本研究は、国家の正統性を擁護する立場と否定する立場の間の論争の検討を通じて、近代国家の正統性をめぐる論争に貢献し、ひいては私たちは個人や集団として日常的に国家にどう対峙すべきかにも光を投じることである。その方法は、現代政治理論で標準的とされるテキストの概念的、論理的分析および「反照的均衡」と呼ばれる手法である。具体的には、いわゆる「分析的政治理論」が提出した国家の正統性を主張する代表的な理論家と、それらを批判する理論家のテキストを分析し、理論的帰結と私たちの「熟慮の上の判断」を照らし合わせることで、国家をめぐる規範的な問いを考察する。

本研究は近代国家についての基礎的、理論的研究であるが、近代国家システムに対する疑念や批判の高まりを背景にして、より実証的な研究や現実の政策論争に対しても意義をもちうると考える。

#### ※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

筆者(谷澤)は、ロールズについて多年にわたり研究を行ってきた。2023 年に刊行された浩瀚な研究書 Paul Weithman, *John Rawls's A Theory of Justice at 50* (Cambridge University Press) では主導的な研究者による最新の成果が集められているため、2024 年前半に同書を集中的に研究し、とくにロールズの正統性理論をめぐる争点についての研究動向を精査した。2024 年後半以降はこの調査をもとに個別の争点を掘り下げて研究した。

そこで明らかになったことの一つは、ロールズによって正当化され、「リベラルな正統性」をもちうるとされた近代国家の理想像(「秩序だった社会」)に対して、これまで以上に根本的な疑問が数多く提起されていることである。ロールズの「正義の二原理」や「政治的リベラリズム」の構想をめぐって多様な批判があること(たとえば功利主義の立場からの格差原理の批判や、コミュニタリアニズムからのリベラルな政治文化に対する批判)があることはよく知られているが、今では批判の焦点はロールズの「理想理論」の立場が本質的に抱える現状維持的、没批判的性格にある。

とりわけ批判的人種理論を代表する論者であるチャールズ・W・ミルズによる批判は、ロールズの理論が合衆国における人種問題をほぼ無視していることを明らかにした上で、その理由を以下の点に見いだした。なおミルズの主著『人種契約』(*The Racial Contract*, Cornell University Press)は 1997 年の著書であり、2022 年には邦訳も刊行されているが、そのロールズ批判の全貌は *Black Rights/White Wrongs* (Oxford University Press, 2017)を含む近年の論考で包括的に示されている。ミルズは 2022 年に亡くなったため、上記の *John Rawls's A Theory of Justice at 50* には、寄稿を予定していながら実現しなかった。代わりに Tommie Shelby, “Race, Reparations,

and Justice as Fairness”という論文が収録されているのであるが、実はミルズはシェルビーよりもずっとロールズに対して批判的である。

ミルズによれば、ロールズは「公正な協働の体系」としての社会の存在を前提としながら、その社会の「基礎構造」が正義にかなっていること(社会が理想的なものであること)は可能であると考え、その理想的な社会の正義原理を、「私たちの政治文化」のなかに探求した。しかしこの試みからは、合衆国の制度や政治が、ひいては近代国家システム全体が、公正な社会的協働などではなく、人種的、階級的、ジェンダー的な支配によって成り立ったという歴史的現実を捉える視点が完全に欠落している。このような欠陥のある観点から近代国家を正当化することは、その不正義、抑圧、差別を根本的な水準で見逃すことになる。それゆえロールズの理想主義的リベラリズムは、より一般的には「白人リベラリズム」(white liberalism)は、近代国家が犯してきた不正義を正当な権力行使として偽装し、不正義をただす試みを妨害することに加担し続けるのである。ミルズによればロールズ本人や白人のリベラルな理論家は言うに及ばず、批判的人種理論の影響を受けたはずのシェルビーのような黒人の理論家によるロールズを継承・発展する試みでさえも、その起源ゆえに、失敗を運命づけられている。

ミルズのロールズ批判、白人リベラリズム批判は非常に強力であり、リベラルな正統性理論の根幹を揺さぶるものであると筆者は考えている。「公正な協働としての社会」という理想自体を放棄しないためには、この理想と近代国家の関係(いったい、近代国家はこの理想に近づくための道具としていくらかでも役に立つのか)を改めて問い直す必要がある。そこで、国家に頼らずに社会を構想する「方法論的アナーキズム」(Jason Lee Byas and Billy Christmas, “Methodological Anarchism”, Gary Cartier and Chad Van Shoelandt eds., *The Routledge Handbook of Anarchy and Anarchist Thought*, Routledge, 2020)の問題提起を真剣に受け止めたうえで、さらなる考察を進めているところである。

#### ※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

ロールズを主題とした単著を近い将来に執筆する予定である。そこではロールズの正統性理論についてのこれまでの研究をまとめ、ミルズらによる指摘を踏まえて、根本的な批判を提起したい。その後はアナーキズム、批判的人種研究、フェミニズムからの正統性批判(近代国家の正当性を疑問に付す議論)について、随時研究発表、論文執筆を行っていきたい。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。